

## 小学校外国語科における

### 「話すこと（やり取り）」に着目した授業研究

－習得から活用への学習過程に重点を置いて－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 野澤 彰

#### 1. 小学校外国語科授業の教育的意義

グローバル化が進展する現代社会において、児童が異なる言語と文化をもつ人々と関わる機会は増えており、早期から外国語に親しみ、他者と関わろうとする態度を育むことが重要である。小学校外国語科は、言語を単なる知識ではなく人と人をつなぐ手段として認識させるとともに、コミュニケーション能力や異文化理解、多様性の尊重を育む役割を担う。また、他教科との関連を通じて探究的学習を進めることにより、児童の将来にわたる学びや生き方を支える教科としての意義を有する。よって、児童の実態に応じた指導の充実が今後一層求められる。

#### 2. 小学校外国語科における「話すこと（やり取り）」の教育的意義

小学校外国語教育は、2017年告示の学習指導要領により「外国語活動」と「外国語科」として体系化され、「聞くこと」や「話すこと（やり取り・発表）」を中心とした言語活動の充実が重視されている。特に「話すこと（やり取り）」は、相手の発話に反応しつつ意図や考えを伝え合う双方向の活動であり、児童が言語を実際に使う手段として重要である。

第二言語習得理論の観点からも、やり取りはインプットとアウトプットを結びつけ、聞き返しや言い換えを通して言語形式への気づきを促す。また、主体性や考えの整理と表現を育み、外国語学習での自信や意欲の向上にも寄与する。一方、発達段階や語彙量、授業の在り方によっては形式的になりやすく、言語材料の精選や非言語的な手がかり、安心して発話できる環境を整備することが不可欠である。「話すこと（やり取り）」は小学校外国語科の授業の中心として重視されるべきである。

#### 3-1. 研究の背景

令和5年度「英語教育実施状況調査」（文部科学省, 2023）によると、90%以上の小学校で外国語活動・外国語科の授業時間の半分以上が言語活動に充てられ、特に「話すこと（やり取り）」と「話すこと（発表）」が全活動時間の平均4.75を占めている。しかし、学校現場での授業実践では、①4技能5領域の習得が実際の活用に至っていない、②話す活動が定型文に限定され十分な相互交流が行われていない、③情報を整理し自らの考えを形成する能力が十分に育まれていない、という課題が確認された。

また、中等高等学校においても、4技能の習熟や学習意欲、統合型言語活動の不足が指摘されている。これらの現状から、小学校における授業構想を見直し、児童が英語を実際に用いる力として習得できる授業の在り方が求められている。

#### 3-2. 研究の方向性

小学校外国語教育は、その後の外国語学習の基盤を形成する上で重要である。本研究では、①児童がコミュニケーションの目的・場面・状況に応じて情報を整理し、自ら考え再構築できること、②既習の英語表現を実際のやり取りの中で活用できることを実現する授業の在り方を重視した。これらの

視点に基づき、「話すこと（やり取り）」に着目し、児童が表現の楽しさや意義を実感できる授業を目指して研究を進めることにした。

以上のことより、本研究の主題は「小学校外国語科における『話すこと（やり取り）』に着目した授業研究 ―習得から活用への学習過程に重点を置いて―」と設定した。

### 3-3. 先行研究に基づく「話すこと(やり取り)」の授業と学習成果

本研究は、児童が英語でやり取りを継続して行う方法を検証することを目的とする。先行研究として、乗富・滝沢（2021）は、段階的に対話の場を設定することで児童が必要な表現を使用し、やり取りをする力を向上させることを示した。また、石塚（2023）では、Teacher Talk と Small Talk を継続的に実施することで、児童のやり取りをする力や語彙数の増加が確認されている。これらを踏まえ、本研究では授業に Teacher Talk と Small Talk の活動を取り入れて、さらに児童同士の対話の場を設けることで、やり取りを続けることや英語表現の活用を促す授業方法を検証する。

### 3-4. 研究の目的・研究仮説

本研究の目的は、児童が習得した英語表現を、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて適切に活用し、英語によるやり取りを行うことができるようにすることである。この目的を達成するために、以下の2点を研究仮説として設定した。

#### 【仮説1】

Teacher Talk および Small Talk を継続的に実施することで、児童は英語によるやり取りの楽しさを実感し、外国語学習に対する肯定的な意識を高めることができる。この仮説の検証は、意識調査の結果を分析する。

#### 【仮説2】

Teacher Talk および Small Talk を継続的に実施することで、児童は既習の英語表現を用い、聞き返しや反応を含むやり取りを行うことができるようになる。この仮説の検証は、パフォーマンステストの結果を分析する。

### 3-5. 研究の方法

本研究の検証方法は3点である。第1に、実践前後に同一内容の意識調査を実施し、児童の意識の変容を分析する。第2に、実践前後にパフォーマンステストを行い、相手の好みに応じた質問での英語表現の使用や、反応・聞き返し表現の有無を評価する。第3に、抽出児2名について意識調査とパフォーマンステストの結果を基に質的分析を行う。抽出児Aは外国語に苦手意識をもつ児童、抽出児Bは苦手意識をもっているが英語で相手と話す意欲を持つ児童である。

#### 4-1. 対象学年・実施日

授業検証は、小学校6年生を対象にしたものである。10月と11月にかけて、帯活動15分を7回授業実践した。

#### 4-2. 児童の実態

児童の実態を把握するため、実践前に意識調査およびパフォーマンステストを実施した。意識調査では、「外国語科の授業は楽しいですか」という設問(図1)に対し、最も多くの児童が「4」と回答した一方、「1」と回答した児童は「英語で話しているときに何と言っているのか聞き取れない。」と述べ、他にも「覚えなくてはいけないと感じる。」との回答が見られ、外国語学習に対して苦手意識をもつ児

童がいることが示された。実践前のパフォーマンステスト(図2)では、ほとんどの児童が学習課題を達成するために必要な質問をする方法を理解できず、やり取りを継続することに困難を感じていた。以上のことにより、児童は英語を「覚えるもの」として捉える傾向があり、授業では十分に音声で習得するインプットする場と、習得した英語表現を活用するアウトプットの場を意図的に設けることが必要である。

図1

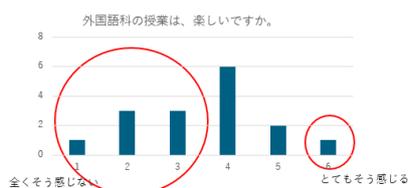
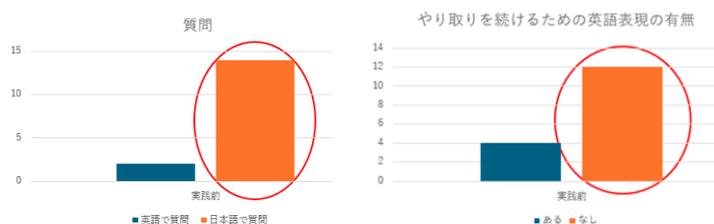


図2



### 4-3. 授業構想

児童の実態調査の結果から、対象児童は英語表現を覚える必要性を感じる一方で、外国語学習に対する意識が徐々に高まっていることが明らかとなった。これらの実態を踏まえ、本単元の授業構想を以下の4点に基づいて設定した。

#### 1. 帯活動の設定

1回15分の帯活動を全7回実施する。

#### 2. Teacher Talk および Small Talk の活用

授業に児童が聞く、反応する機会を確保する活動を取り入れる。

#### 3. 学習課題に基づく言語材料の明確化

児童が学習課題を達成するために考案した質問内容を、本単元で扱う英語表現として位置付ける。

#### 4. やり取りを継続するための表現導入

問い返し、聞き返し、反応など、相手との対話を持続させる英語表現を取り入れる。

児童が学習の見通しを持ち、音声中心の学習に安心して取り組めるよう、毎回同一の授業形態で実施した。まず Teacher Talk で本時の英語表現をつかませて、続いてパターンプラクティスで習得させた。その後、学習課題で表現を活用する Small Talk を2回設定した。Small Talkの間には中間指導を行い、児童の疑問やつまづきを解消した。2回目では、児童がやり取りを続けることができていることと質が高まっていることを実感することができるようにした。この過程により、児童は安心して英語でのやり取りに取り組み、他者に伝えたい意欲が育まれると考え、図3のように授業の流れを考えた。

図3

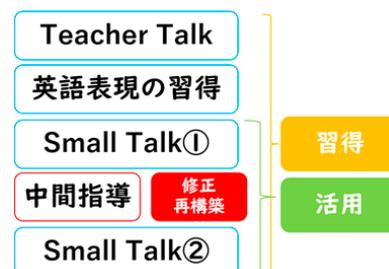


図4

質問内容	
好きな野菜	①
好きな味付け	
温かい・冷たい	
濃い味・薄い味	②
アレルギーの有無	
麺の量 麺の硬さ	

### 4-4. 学習課題

本単元の学習課題は「野澤先生に喜んでもらえるほうとうを作ろう」である。児童には課題達成に必要な質問内容を思考ツールで考えさせ、図4の①を本単元で扱う英語表現、②を Small Talk で活用可能な表現として位置付けた。事前に考案し

た質問を学習課題と関連付けることで、実践的な英語表現を用いてやり取りをすることを意識させて、学習課題を達成することにつなげる。

#### 4-5.指導計画について

本研究では、指導の前後で2分間のパフォーマンステストを実施し、児童がやり取りをする変容を分析することにした。

また、授業後には、児童が任意で学習した英語表現を活用し、ALTに「ALTに喜んでもらえるように、ALT好みのほうとうをつくらう」という学習課題に挑戦させる活動を行った。これにより、児童が習得した英語表現を実際のコミュニケーションを図る場で使用する機会を設けた。

下記に、本研究で実施した帯活動（15分×7回）の指導計画を示す。

	学習内容
1	オリエンテーション ・やり取りとは何か、何を目的にやり取りをするのかについて理解する。
2	・やり取りを続けるために、聞き返しや反応の英語表現を確認する。
3	・相手に好きな食品について質問をする、答える。
4	・相手に好きな野菜について質問をする、答える英語表現を理解する。
5	・相手に好きなスープの味について質問をする、答える。
6	・相手に冷たいものと温かいものどちらが好きかについて質問をする、答える。
7	・これまでに学んだ英語表現を用いて、やり取りの練習をする。 *学習課題は、「相手に喜んでもらえるように友達好みのほうとうを作ろう」とする。

#### 4-6. 本単元で扱う言語材料

本実践では、児童が相手にほうとうの好みについて質問をする活動を通して、英語でやり取りを続けることを学習課題とした。具体的には、以下の英語表現を言語材料とした。

相手の好きなもの（食材、冷たいまたは温かいほうとう）について尋ねる表現

A: Do you like ~?  
B: Yes, I do. / No, I don't.

相手の好きなもの（野菜、スープの味）について具体的に尋ねる表現

A: What (vegetables/soup) do you like?  
B: I like ~.

冷たいほうとうと温かいほうとうのどちらを好むか尋ねる表現

A: Which do you like better, cold Houtou or hot Houtou?  
B: I like cold Houtou. / I like hot Houtou.

これら3つの表現は、児童が学習課題を達成するために考案した質問内容を基に設けたものである。

さらに、やり取りを継続するための表現として、以下の英語表現を扱った。

□相手の発話に反応する表現

Me, too. / Not me. / I see. / Really?

□相手の発話内容を確認する聞き返し表現

I like potatoes. → You like potatoes?

□同じ内容について相手に尋ね返す表現

How about you?

児童は相手と英語でのやり取りを続けることができるように、これらの英語表現を用いることにした。

#### 4-7. 意識調査の結果と考察

実践前後の意識調査により、児童の外国語学習に対する意識の変化を検証した。設問1「外国語科の授業は楽しいですか」(図5)では、実践後に「5」と回答する児童が増加し、「1」と回答する児童がいなかった。設問2「相手と英語で話すことは楽しいですか」(図6)では、ほとんどの児童が「4」「5」「6」と回答し、自分の英語が相手に伝わる楽しさを実感していることが分かった。設問3「これから英語で話せるようになりたいですか」(図7)では、実践後も英語で話そうとする児童の姿が見られた。

本研究の結果から、Teacher Talkによるやり取りのモデルの提示、Small Talk および中間指導を継続して行い、さらに音声から英語表現をインプットすることにより、児童は授業の見通しを持ち、安心感をもって活動に取り組むことができることが示された。その結果、児童のやり取りをする力の向上および英語でのコミュニケーションを図る意欲を醸成させることができると明らかとなった。また、言語指導において、児童に「なぜ英語を使用するのか」というコミュニケーションの必然性を意識させることの重要性も示唆された。

図 5

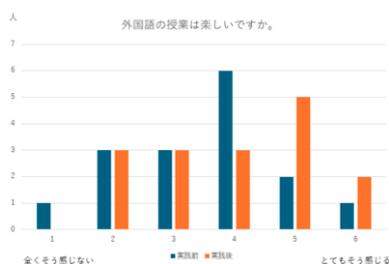


図 6

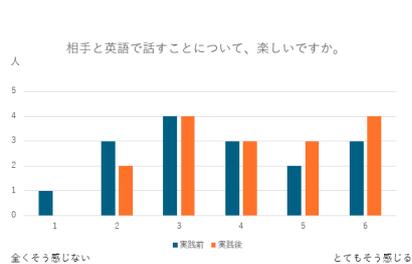
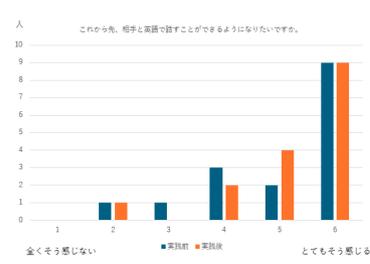


図 7



#### 4-8. パフォーマンステストの結果と考察

対象児童の実態①から、帯活動において同一の授業の流れを継続して行うことにより、児童が学習の見通しをもって取り組むことが可能になることが明らかとなった。また、授業でTeacher TalkとSmall Talkを取り入れることで、音声を通じた英語表現の習得が促進され、さらにSmall Talkの間に中間指導を行うことで、英語で話すことに苦手意識を感じている児童が安心して学習に取り組むことができた。

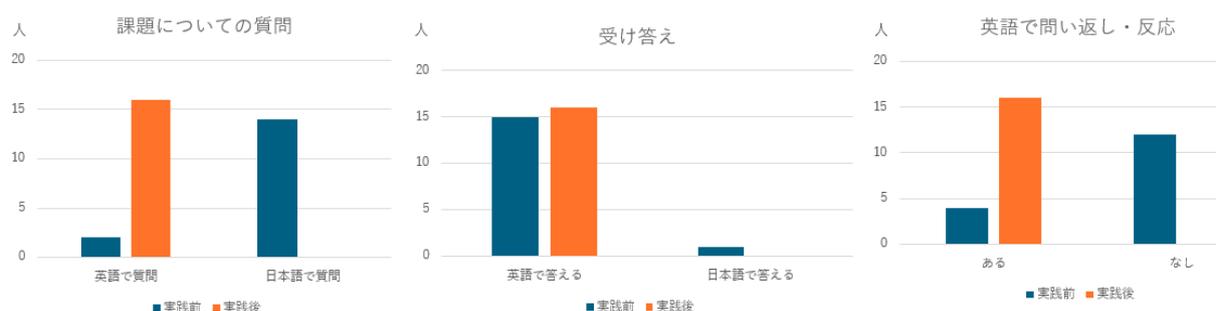
次に、対象児童の実態②からは、目的や場面、状況に応じたやり取りを行うことの有効性が確認された。具体的には、児童の考えを基にした言語材料を本単元で扱う英語表現として設定することで、児童は学習課題を自分事として捉え、主体的に活動に取り組む姿勢が育まれた。また、問い返し、聞

き返し、反応の英語表現を活用することにより、やり取りを継続的に行うことが可能となった。授業の第1・2時では、やり取りとはどのような活動であるのかを理解させるとともに、やり取りを続けるために問い返し、聞き返し、反応の英語表現を指導した。第3時以降は、既習の英語表現や問い返し、聞き返し、反応の表現を用いることを意識させて Small Talk を行った結果、児童は自力で英語を用いてやり取りをすることができるようになった。

また、習得した表現を活用する場を意図的に設定し、英語で話すことに抵抗を感じる児童に対して中間指導を行ったことで、安心して学習活動に取り組めることも確認された。

さらに、パフォーマンステストの結果から、以下の4点が明らかとなった。第1に、Teacher Talk から Small Talk へと段階的につなぎ、中間指導を行うことで、音声中心の言語表現の習得が促進された。第2に、問い返しや反応の英語表現を意識させることで、教師と児童、児童同士のやり取りを継続できるようになった。第3に、やり取りを行う場を継続的に設定することで、児童が英語を話す自信を持つことができた。第4に、目的、場面、状況を意識したやり取りを行うことで、児童は意欲的に言語を習得することができた。以上のことから、帯活動に基づく段階的な授業構成は、児童が安心して英語表現を習得し、やり取りを継続する能力の向上に有効であることが示された。特に、Teacher Talk や Small Talk、中間指導、児童が考えた言語材料、やり取りを続ける英語表現の指導を統合した授業構想は、主体的に学ぶ児童の姿とコミュニケーション意欲の向上に寄与することが明らかとなった。

図 8【パフォーマンステストの実践前と実践後の結果】



#### 4-9. ALT とのやり取りにおける実践結果

本単元の授業実践後、3名の児童が ALT との英語によるやり取りに挑戦した。実践前後の意識調査の結果を分析したところ、授業を通して、児童は音声中心の指導により自分の英語が相手に伝わる達成感を得ていたことが示された。また、学んだ英語表現ややり取りの方法を、他の場面でも活用したいという意欲が高まっていることも確認された。

これらの結果から、児童は主体的に ALT とのやり取りに取り組む姿勢を示し、授業で習得した英語表現を実際のコミュニケーションに生かす能力を発揮していたことが明らかとなった。さらに、音声中心の Teacher Talk および Small Talk を継続的に取り入れた授業構想が、児童の自信と意欲の向上に寄与していることが示唆された。

#### 4-10. 抽出児の授業実践における意識調査および学習成果

##### 【抽出児 A】

授業実践前後に実施した抽出児 A の意識調査の結果(表 1)、児童は授業を通して他者と英語でやり取りをする楽しさを感じ始めていることが確認された。一方で、英語を「覚える(暗記する)」という学習観だけでは、言語習得につながりにくいことも明らかとなった。これに基づき、授業では、音声を通した十分なインプットと、それを活用するアウトプットの経験をさらに増やす必要があると考えら

れる。

また、パフォーマンステストの結果(表2)からは、実践後に抽出児Aが授業で扱った英語表現を意識的に使用しようとする姿が見られた。これは、帯活動の中で毎時間、習得した表現を活用する場を設けたことにより、学んだ英語表現を実際のやり取りで応用できる力が育まれたことを示している。一方で、「How about you?」などの受け答えをする表現については、十分に定着していないことも認められた。今後は、この表現を含めたやり取りの指導を継続し、定着を図る必要がある。

表1

〈意識調査(実践前)〉		〈意識調査(実践後)〉	
	回答		回答
設問1	1	設問1	2
設問2	2	設問2	2
設問3	2	設問3	2

表2

〈パフォーマンステスト(実践前)〉	〈パフォーマンステスト(実践後)〉
S:好きな味は?	S: Do you like carrot?
T: I like miso.	T: Yes, I do. How about you?
S:好きな野菜は?	S: Yes, I do. What vegetables do you like?
T: I like tomatoes and potatoes.	T: I like potatoes and eggplants.
Do you like carrots?	S: Me, too. What soup do you like?
S: Yes, I do. How about you?	T: I like miso soup.
T: I like carrots, too.	S: Which do you like better, cold Houtou or hot Houtou?
S: Me, too.	T: I like cold Houtou. <b>How about you?</b>
	S: <b>No, I don't.</b> Do you like onions?
	T: Yes, I do.
	S: Me, too.

### 【抽出児B】

授業実践後、抽出児Bは習得した英語表現を用いてALTとのやり取りに挑戦する姿が確認された。このことから、児童には他者と英語で話してみたいという意欲が芽生え始めていることが示唆される。また、帯活動の中で目的、場面、状況に応じたやり取りを継続的に経験したことにより、即興的に英語で応答する力が育ちつつあると考えられる。加えて、同一の授業の流れで取り組んだことにより、児童は学習の見通しと安心感をもって活動に臨むことができ、これが変容に寄与したと考えられる。(表3)

パフォーマンステストの結果(表4)からも、実践前後の変化が確認された。実践前は、「Do you like ~?」の表現は使用できていたものの、質問内容が学習課題とずれていた。一方、実践後は、授業で学習した英語表現を多く用いながら、相手とのやり取りを継続的に行うことができていた。この成果は、Small Talkの途中で中間指導を設定し、英語表現を修正した上で再度やり取りを行ったことが、英語表現の習得と活用の両面を促進した結果であると考えられる。

表3

〈意識調査(実践前)〉		〈意識調査(実践後)〉	
	回答		回答
設問1	1	設問1	2
設問2	2	設問2	2
設問3	2	設問3	2

表4

〈パフォーマンステスト(実践前)〉	〈パフォーマンステスト(実践後)〉
S:好きな味は?	S: Do you like carrot?
T: I like miso.	T: Yes, I do. How about you?
S:好きな野菜は?	S: Yes, I do. What vegetables do you like?
T: I like tomatoes and potatoes.	T: I like potatoes and eggplants.
Do you like carrots?	S: Me, too. What soup do you like?
S: Yes, I do. How about you?	T: I like miso soup.
T: I like carrots, too.	S: Which do you like better, cold Houtou or hot Houtou?
S: Me, too.	T: I like cold Houtou. <b>How about you?</b>
	S: <b>No, I don't.</b> Do you like onions?
	T: Yes, I do.
	S: Me, too.

## 5-1. 授業研究から得られた知見

本研究の授業実践を通して、次の4点が明らかになった。

### 1. 授業構想の適合性

検証の結果、本研究で設定した4つの授業構想は、対象児童の実態に適していたことが示された。これにより、児童の外国語学習に対する苦手意識の軽減や、学習への主体的な取り組みを促す効果が確認された。

### 2. 音声中心の習得の有効性

授業にTeacher TalkおよびSmall Talkを取り入れることで、児童は音声を中心に英語表現を習得することができた。特に、聞くことと話すことを一体化した活動が、習得の促進に寄与したことが示唆される。

### 3. 継続した英語表現を用いてのやり取り

既習の英語表現や問い返し・反応の表現を継続的に用いてやり取りを行うことは、教師と児童、また児童同士のやり取りを続ける、発展させる上で有効であった。さらに、目的、場面、状況に応じたやり取りを継続的に行うことが、即興性のあるやり取りにつながることも確認された。

### 4. 中間指導の効果

2回の Small Talk の間に中間指導を位置付けることで、児童は安心感をもって学習活動に取り組むことができた。この介入により、児童は自信をもって表現を使用し、やり取りを継続する態度を形成することができた。

以上の知見から、児童の実態に応じた段階的な指導や、音声を中心としたインプット、継続して英語表現を活用するアウトプット、中間指導は、児童が英語でやり取りをする力の育成に有効であることが明らかになった。

## 5-2. 今後の課題と展望

本研究の授業実践を通して、帯活動において児童のやり取りをする力を向上させるためには、Teacher Talk や Small Talk を継続的に取り入れることが有効であることが明らかになった。

今後は、個別最適な学びの視点から、授業内でやり取りを行う前段階として、児童が一人一台端末を活用し、個人で英語表現ややり取りの練習に取り組ませることで、やり取りをする力の向上を図っていきたいと考えている。

また、児童がやり取りを継続できるようにするとともに、やり取りの過程で得た情報を自ら整理・再構築し、「話すこと（発表）」や「書くこと」へと発展させる指導方法を追究する必要がある。これにより、言語活動の質をさらに高め、児童のコミュニケーション能力および学習意欲の持続的な育成につながることを期待される。

### 謝辞

本研究の実施にあたり、先生方並びに 16 名の児童の皆さんに多くのご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

## 6. 引用・参考文献

- ・石塚 歩 (2023). 「パフォーマンステストとルーブリックで見取る 17 ヶ月の Small Talk の実践と成果」
- ・島岡 丘 (1998). 『第二言語習得の研究』大修館書店
- ・小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編 (文部科学省)
- ・小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック (文部科学省)
- ・鈴木 祐一 (2024). 『あたらしい第二言語習得論』研究社
- ・鈴木 渉 (2017). 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店
- ・瀧沢 広人 (2019). 『英語教師のための Teacher's Talk&Small Talk 入門』明治図書
- ・乗富 智子・滝沢 雄一 (2021). 「小学校外国語科における話すこと（やり取り）の力を育成するための段階的指導」
- ・濱崎 孔一廊・石原 知英 (2020). 「小学校外国語科における思考力・判断力・表現力の指導について」